

大学の人的・物的資源を活用した子育て支援プログラムの検討 — 親の子育てへの思いと期待する支援 —

藤田 藍津子^{†1}, 玄番 千恵巳^{†1}, 今留 忍^{†1}, 田中 恵美子^{†2}

(令和2年12月9日査読受理)

Childcare Support Program Utilizing University Human and Physical Resources: Support for thoughts and expectations of parents about childcare

Fujita, Atsuko^{†1} Genba, Chiemi^{†1} Imatome, Shinobu^{†1} Tanaka, Emiko^{†2}

(Accepted for publication 9 December, 2020)

要約

本研究の目的は、子育て支援施設を運営する大学に対し親が求める支援について明らかにすることである。A大学所在地B市及び隣接するC市の保育所、児童館、子育て支援センターを利用する保護者に質問紙調査を行った。2000部配布し、回収は552部(回収率約28%)であった。子育てに対する思いとして、ポジティブな思いとネガティブな思いがあることが明らかになった。ポジティブな思いは、幸せが最も多く、ネガティブな思いは、疲労感が最も多かった。期待する支援は、反抗期・発達知識、子育てカフェ、クッキングが上位であった。「ポジティブ」「ネガティブ」「両方の思い」の3群が期待する支援17項目のどの支援を選んでいるか検討した結果、ポジティブ群は、つながり・体験等の交流のある支援を期待していた。一方、ネガティブ群の多くは交流や体験を求めず、個別対応を取り入れたプログラムを必要としていることが示唆された。

Abstract

This study elucidated the types of support parents seek from universities that manage childcare support facilities. A questionnaire survey was conducted with targeted parents using nursery, day care, and childcare support centers in City B, where A University is located, and adjacent C City. The researchers distributed 2000 surveys and received 552 completed responses (response rate of about 28%). The results revealed that positive and negative feelings exist toward childcare. A sense of happiness and contentment was the most frequently cited positive feeling, while fatigue was the most frequently cited negative feeling. The kinds of support that most parents were seeking included acquiring knowledge about children's rebellious phase and child development, childcare cafes, and cooking. After further investigating which of the 17 kinds of support were sought after by three different groups (those with positive, negative, and both positive and negative feelings toward childcare), it became clear that the "positive" group was looking for activities where they get to connect with other people to exchange and share experiences, while most parents in the "negative" group were looking for programs of more personalized nature that addressed their specific requirements.

キーワード: 大学, 子育て支援プログラム, 期待する支援, 子育てへの思い

Key words: university; childcare support program; support for thoughts; expectations of parents about childcare

1. はじめに

近年の日本では、虐待、子育ての孤立等が社会的な問題として取り上げられている。また、育児ストレスが高い場合は虐待につながる¹⁾との報告があるように、子育て世代をめぐる問題は、多様化し、深刻化している。その背景には、女性の社会進出、核家族化、地域とのつながりの希薄化等があげられる。

子育て世代が、大きな負担や不安を感じることなく安心して子育てができるよう地域・社会全体で子育てを支援し

ていく必要がある。

現在、政府は子ども子育て支援法(平成24年)をもとに、子育て支援事業を展開している。NPO法人、保育所、幼稚園や地域子育て支援センターなどの地域を中心とした子育て支援活動は各地域でも活発に行われている。地域における子育て支援の調査²⁾において、母親は育児負担を軽減できる時間と場所、育児知識、技術に関する支援を求めており、病院・大学等の専門家が場所を提供し、子育て支援に関わることは、養育者同士が話し合う場の提供と、専門家に気軽に相談しニーズに応える場になったことが報告されている。一方、近年、4年制大学や短期大学において、大学

^{†1} 東京家政大学健康科学部看護学科

^{†2} 東京家政大学人文学部教育福祉学科

を子育て支援の拠点施設として活動している例も徐々に増えている。大学における子育て支援の調査では³⁾、子育て支援を行っている大学は62校と報告され、大学のリソースとしての教員の活用について述べられている。

子育て支援施設を有するA大学は、保健師、助産師、看護師、理学療法士、作業療法士、保育士等を養成する大学である。保育所、産後ケアサロン、訪問看護、放課後等デイサービスが、附置施設である。A大学には、看護・発達心理・保育を専門とする教員が在籍しており、専門性を活かして産後の母親と子どものケア、0歳から5歳児の保育に関与している。発達障害のある子どもを対象とした放課後等デイサービスは、子育て支援施設であり、臨床経験を豊富に積んだ看護、保育、療育、心理、医療の専門職者が在職しており、平日・土曜日、必要に応じて日曜祝日の日中に開所している。

大学で行う子育て支援は、行政支援よりも自由度があり、継続的な支援が難しい場合に対しても個別支援、グループアプローチ等、継続的な対応が可能であるとされている。大学における子育て支援は、教育効果においても一定の効果が報告されている。看護大学による子育て支援では⁴⁾、参加者の満足度が高く、地域貢献の視点と学生に対して学習効果と学習意欲を高める効果があると報告されている。このように、地域の子育て支援については、さまざまな形態や目的を持ち独自に展開しているのが現状である。

子育て支援事業はまだ緒に就いたばかりであり、保護者の育児不安を軽減するための子育て支援は、保護者のニーズを十分に満たしているとは言えない。育児不安は、個人の心理的な問題にされてしまうことも多い。

子育てへの感情(思い)と育児不安、育児ストレスについては、育児不安の本態は育児困難であり、困惑とネガティブな感情からなる心性⁵⁾との指摘がある。ネガティブな経験そのものが育児関連ストレス⁶⁾につながり、子育てへの感情(思い)、育児不安、育児困難は互いに連鎖している⁷⁾と考えられる。育児に対する自信が育児を前向きに捉えている⁷⁾ことにつながり、専門性の高いA大学が、人的・物的資源を活用することにより子育てに対して自信が持てるよう支援することができる考えた。

2. 研究目的

本研究では、親の子育てへの思いに着目し、子育て支援施設を運営する大学に対し親が期待する支援について明らかにする。また、明らかになった親が期待する支援内容に基づく子育て支援プログラムについて検討する。

3. 研究方法

3.1 調査対象および調査期間

A大学に隣接するB市、C市の保育所、児童館、子育て支援センターを利用する保護者に質問紙調査を行った。調査期間は令和1年12月～令和2年1月である。

3.2 調査内容

調査内容は、属性(住まい、回答者の年齢、性別、子どもとの関係、子どもの年齢、子どもの人数)、子育てへの思い、子育て支援施設をもつA大学に期待する支援である。

3.3 データ収集方法

A大学に隣接するB市、C市の保育所、児童館、子育て支援センターに質問紙を2,000部設置し、利用する保護者が記載した後、郵送による回収を行った。

3.4 分析方法

子育てへの思いと期待する支援の関連については、カイ二乗検定を行った。統計分析には、IBM SPSS Statistics23を使用し、有意水準を5%とした。期待する支援は、A大学が有する専門性により知識に関する支援、交流に関する支援、体験に関する支援に分け命名した。

3.5 倫理的配慮

対象とする回答者に、依頼文と同意書の説明を文書にて行った。質問紙調査用紙には問い合わせ番号を記載し、調査後の同意取り消しについても不利益は一切生じない、匿名性が保持されることを文書にて十分に説明した。研究者所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た(健2019-3)。

4. 結果

4.1 対象者の概要

郵送にて回答のあった質問紙は、552部(回収率約28%)で、すべて分析対象とした。回答者552名中、居住地B市256名(46%)C市283(51%)、その他の地域12名(2%)、子どもとの関係は、母親521名(94%)、父親29名(5%)、対象者の年齢は平均35.8歳±4.5歳、子どもの年齢は平均4.0歳であった。子どもの数は平均1.8人であった。

4.2 子育てへの思い

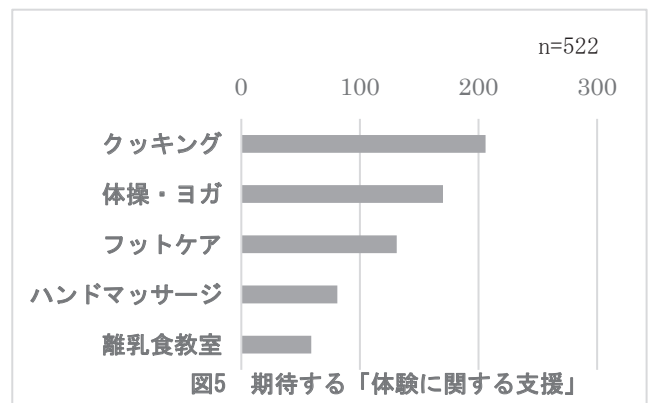
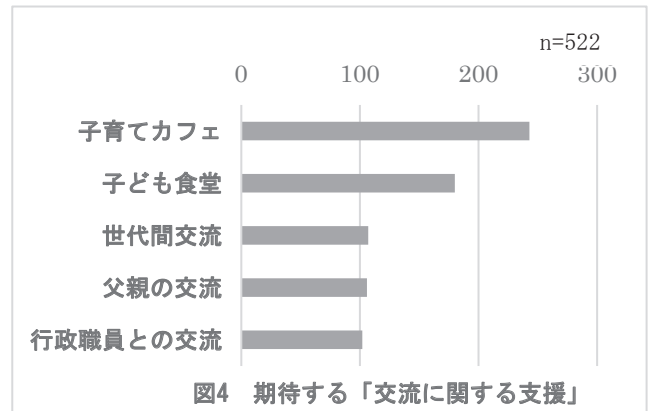
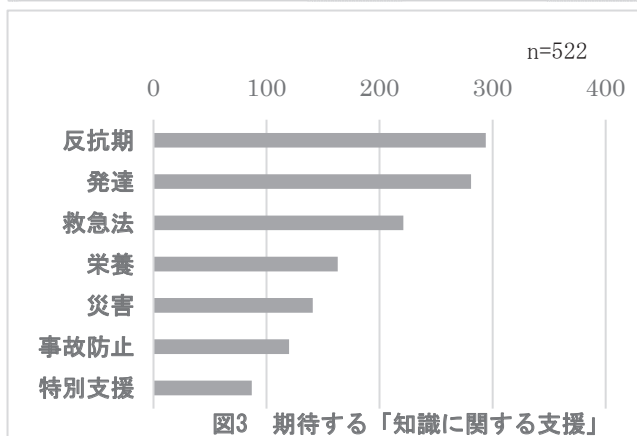
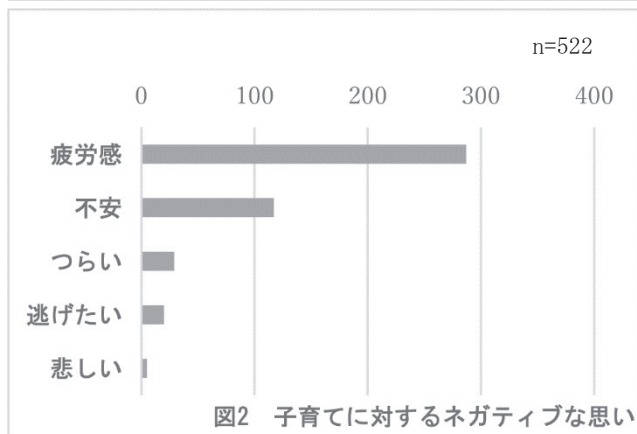
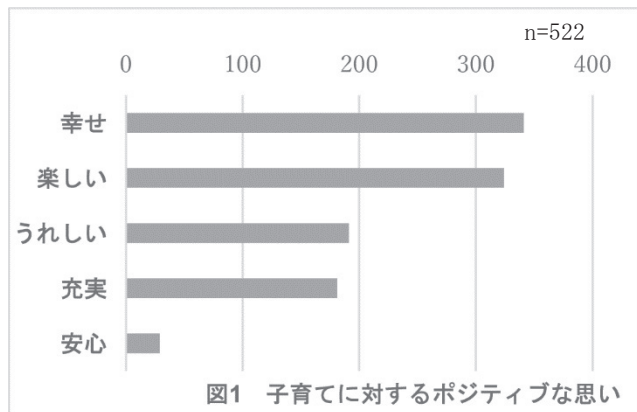
子育てに対してポジティブな思い(複数回答)は、幸せ341名(62%)、楽しい324名(59%)、うれしい191名(35%)、充実181名(33%)、安心29名(5%)と回答している。ネガティブな思いは、疲労感287名(52%)、不安117名(21%)、つらい29名(5%)、逃げたい20名(4%)、悲しい5名(1%)で、疲労感、回答者の約50%を占めていた。図1、図2は、子育てへの思いの結果である。

4.3 A 大学に期待する支援

期待する子育て支援（複数回答）を、知識、体験、交流に関する支援に分類すると、知識に関するものが最も多く、反抗期 294 名（53%）、発達 281 名（51%）、救急法 221 名（40%）、栄養 163 名（30%）、災害 141 名（26%）、事故防止 120 名（22%）、特別支援 87 名（16%）であった。

交流に関する支援は、子育てカフェ 243 名（44%）、子ども食堂 180 名（33%）、世代間交流 107 名（19%）、父親の交流 106 名（19%）、行政職員との交流 102 名（18%）であった。

体験に関する支援としては、クッキング（時短料理・親子料理）206 名（37%）、体操・ヨガ 170 名（30%）、フットケア 131 名（24%）、ハンドマッサージ 81 名（15%）、離乳食教室 59 名（11%）が挙げられていた。図 3、図 4、図 5 は、A 大学に期待する支援の結果である。



4.4 子育てへの思いと期待する支援との関係

子育てに対して「ポジティブな思い」や「ネガティブな思い」と大学に期待する支援との関連について検討するために、「ポジティブな思い」（5項目5点）と「ネガティブな思い」（5項目5点）をそれぞれ1項目1点とし、点数の高い方を優位な思いとした。「ポジティブな思い」と「ネガティブな思い」が同点の場合は、「両方の思い」とした結果、「ポジティブな思い」群 357 名（65%）、「ネガティブな思い」群 51 名（9%）、「両方の思い群」114 名（26%）であった。

「ポジティブな思い」「ネガティブな思い」「両方の思い」の3群について、期待する支援17項目のどれを選んでいるか検討した結果、子育てカフェに有意差（ $P < 0.05$ ）があった（表1）。子育てに対してポジティブな思いを持つ親は、期待する支援として子育てカフェを高率で選択していた。その他の期待する支援に有意差はみられなかった。

さらに、期待する支援の内容を知識に関する支援（7項目：発達、事故防止、災害、救急法、反抗期、栄養、特別支援）、交流に関する支援（5項目：子ども食堂、子育てカフェ、父親の交流、世代間交流、行政職員との交流）、体験に関する支援（5項目：クッキング（時短料理・親子料理）、離乳食教室、体操・ヨガ、ハンドマッサージ、フットケア）の計17項目に各1点を配点し、「ポジティブな思い」「ネガティブな思い」「両方の思い」の各群における割合を算出した。知識に関する支援では、ポジティブな思い群の上位の点数は2点29%が最も多く、次いで1点20%、3点18%

であった。ネガティブな思い群の上位の点数は、3点25%が最も多く、次いで1点24%、0点と2点が18%であった。両方の思い群の上位の点数は、2点33%が最も多く、次いで1点26%、3点17%であった。

知識に関する支援は、子育てへの思いに関わらず、1点と2点、もしくは3点が20%を超えており3群とも知識に関する支援を期待していた(表2)。交流に関する支援は、ポジティブな思い群の上位の点数は1点38%が最も多く、次いで2点25%、0点19%であった。ネガティブな思い群の上位の点数は、0点41%が最も多く、次いで2点27%、1点18%であった。両方の思い群の上位の点数は、1点40%が最も多く、次いで0点26%、2点24%であった。

ポジティブな思い群は、1点と2点を合わせると半数以上が、交流に関する支援を期待していたが、ネガティブな

思い群は、約4割は交流に関する支援を選択しておらず、期待していなかった(表3)。体験に関する支援は、ポジティブな思い群の上位の点数は0点35%が最も多く、次いで1点28%、2点18%であった。ネガティブな思い群の上位の点数は、0点55%が最も多く、次いで1点27%、2点12%であった。両方の思い群の上位の点数は、0点38%が最も多く、次いで1点32%、2点15%であった。体験に関する支援はポジティブな思い群と両方の思い群の約3割が0点であり、体験に関しては全体的に0点の割合が多い傾向にあった。さらに、ネガティブな思い群では、約半数が0点であり、体験に関する支援を期待しない傾向にあった(表4)。

表1：子育てへの思い3群の子育てカフェの選択

子育てへの思い	子育てカフェ		合計(%)
	選択した(%)	選択しなかった(%)	
ポジティブな思い群	171 (46.6)	186(52.1)	357(100) *
ネガティブな思い群	17 (33.3)	34(66.6)	51(100)
両方の思い群	55 (38.2)	89(61.8)	144(100)

*P<0.05

表2：子育てへの思い3群が知識に関する支援を選択した割合

	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	合計
ポジティブな思い群	32(9%)	71(20%)	104(29%)	66(18%)	42(12%)	27(8%)	11(3%)	4(1%)	357
ネガティブな思い群	9(18%)	12(24%)	9(18%)	13(25%)	5(10%)	0(0%)	1(2%)	2(1%)	51
両方の思い群	8(6%)	38(26%)	48(33%)	25(17%)	16(11%)	4(3%)	4(3%)	1(1%)	144

表3：子育てへの思い3群が交流に関する支援を選択した割合

	0点	1点	2点	3点	4点	5点	合計
ポジティブな思い群	69(19%)	137(38%)	91(25%)	43(12%)	12(3%)	5(1%)	357
ネガティブな思い群	21(41%)	9(18%)	14(27%)	4(8%)	3(6%)	0(0%)	51
両方の思い群	38(26%)	57(40%)	35(24%)	11(8%)	2(1%)	0(0%)	144

表4：子育てへの思い3群が体験に関する支援を選択した割合

	0点	1点	2点	3点	4点	5点	合計
ポジティブな思い群	124(35%)	99(28%)	64(18%)	45(13%)	19(5%)	6(2%)	357
ネガティブな思い群	28(55%)	14(27%)	6(12%)	2(4%)	1(2%)	0(0%)	51
両方の思い群	55(38%)	46(32%)	22(15%)	14(10%)	5(3%)	2(1%)	144

5. 考察

5.1 子育てへの思いと A 大学に期待する支援

子育てに対してネガティブな思いの 5 割を占めた疲労感、頑張っているのに、何だか思うようにならない、予定通りにはいかないといったことに起因していると考えられる。

また、約 3 割が不安を選択していたことから、ネガティブな思いには子育てがづらい、子育てに自信が持てないなどの悩みや不安が大きく関与していると考えられる。

A 大学に期待する子育て支援は、知識に関するものが最も多く、反抗期と発達障害が回答者の 5 割、救急法が約 4 割という結果は、大学の子育て支援事業⁸⁾を利用している親の気がかりなこととして、発達や栄養をあげる保護者が多いと報告している先行研究とほぼ合致するものであった。交流に関する支援では、子育てカフェ 4 割、子ども食堂 3 割が支援を期待しており、人とのつながりを求めていると考えられる。養育者と共に考える子育て支援⁹⁾では、育児体験者と子育てのあり様を共有し、知ること、看護職等からの具体的なアドバイスを気軽に求めることを挙げている。

体験に関する支援では栄養ともつながるクッキング(時短料理・親子料理)が上位に挙げられていた。

子育てへの思いに関わらず知識に関する支援への期待が高かったことについては、子どもの健やかな成長と発達を願う親の思いが反映されている結果と考えられる。子育てに対するポジティブな思いが強い親の半数は交流に関する支援を期待していたが、ネガティブな思いが強い親は、約 4 割が交流に関する支援を選択しておらず、期待していない傾向にあり、体験に関する支援についても期待しない傾向がさらに強かった。育児困難感の研究では、母親自身の育児に対するネガティブな感覚が育児困難につながる¹⁰⁾とされ、育児困難の高い母親は育児に対する相談先を知らない、相談相手がいないといった母親の孤立化が指摘されている。子育てに対してネガティブな思いを持つ親は、交流や体験、言い換えると「つながり」「自ら実践してみること」に対して消極的であるといえる。逆に、育児困難感が低い母親は自分の思いの表出、外に出る機会も多く、母親同士の仲間に入れる母親が多い¹¹⁾。ネガティブな側面は母親の対人関係に影響する¹²⁾ことが報告されており、本調査結果を裏づけるものである。

母親の育児の困難感と支援ニーズの調査¹³⁾では、母親が育児をポジティブに捉えることが出来るようにサポートをする必要性について述べられている。今回の調査結果から、ネガティブな思いの親に対しては、子育てに対してポジティブに捉えられるように、人との交流や体験の形式ではない支援を工夫する必要があると考えられる。

5.2 A 大学に期待する子育て支援プログラムの検討

回答者の居住地は、A 大学所在地の B 市、隣接する C 市

が約半数ずつであったこと、9 割は母親による回答であったこと、子どもの平均年齢が 4 歳であったことから、幼児期の母親が抱く子育てへの思いと A 大学に期待する支援が示唆されている。

期待する支援では、上位の傾向にあったのは知識に関する支援であり、子育てに対してどのような思いの親も支援を期待していた。特に反抗期、発達、救急法に関する知識の支援は 4 割を超えており、知識提供をベースとしたプログラムは効果的であり多くの対象者の期待と合致すると考えられる。さらに、交流に関する支援では、4 割近くが子育てカフェを期待しており、カフェ形式による知識の提供と共有を図る形も有効であると考えられる。さらに、A 大学は、人の生 (life) を支える学の構築に取り組む大学であることから、栄養 (知識・クッキング)、自らの身体をケアする支援を期待する対象が多いことが特徴であると推察できる。特に、栄養の知識面とクッキングを取り入れたプログラムも可能である。子育てカフェのような形の中で、子育てに関する知識の獲得と共有、さらに人とのつながりが期待できるプログラムを提案できる。

子育て支援を実施するにあたり、少人数参加型の子育て支援プログラム¹⁴⁾では、少人数であること、1 対 1 で相談できる場があることが自分を認めて子育てへの自信につながるとしている。子育てに困難を抱える親への支援では、初めは支援者と個々につながるところから始まり、支援者とつながることサークルや交流に参加することで不安の軽減¹⁵⁾、育児の対処能力を高める¹⁶⁾ことに効果的であるといわれている。今後、交流や体験などの支援を行った場合は、ポジティブな思いを持つ対象者が多く参加することが考えられる。支援を必要とするネガティブな思いの親に対しては、初めは知識を共有する形の支援から始まり、必要に応じて、個別支援も考えていく。また、A 大学には産後ケアサロンがあり、乳児から連続した子育て支援プログラムも可能である。

6. 結論

回答者の多くは、楽しい、うれしい、幸せといった思いを抱きながら子育てをし、知識に関する支援を期待していた。A 大学の子育て支援プログラムの構築においては、子育てへの思いと支援内容が密接に関係しており、ネガティブな思いの親に対しては、はじめは知識を共有する形の支援から始まり、個別支援の必要性が示唆された。

7. 研究の限界

本研究は、A 大学に対して親が期待する支援であり、大学によって特性が異なるため、一般化には限界がある。しかし、幼児期を育てる母親の思いや期待する支援に関する

一考察として役立つであろう。今後は、本研究の結果をもとに対象を広げ、実践介入に至るまで検討したい。

謝辞

お忙しい中、回答に協力していただきました対象の皆様、配布にご協力いただきましたB市、C市の職員の方々に心よりお礼申し上げます。

本研究は、2019年度東京家政大学総合研究プロジェクトの一環として実施した。

参考文献

- 1) 中谷美奈子, 中谷素之: 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響, 発達心理学研究, Vol. 17, No. 2, pp. 148-158(2006)
- 2) 黒田裕子, 木村ちひろ: 地域における子育て支援に関する文献検討, 姫路大学看護学部紀要, Vol. 11, pp. 21-30(2019)
- 3) 大元千種, 大鷲香, 浜田登美子, 他: 大学における地域支援に関する調査報告 - 子育て支援と発達支援を中心として -, 筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報, Vol. 21, pp. 195-208(2010)
- 4) 大林陽子, 岡田由香, 緒方京, 他: 大学を拠点とした子育て支援活動の活動報告と評価, 愛知県立大学看護学部紀要, Vol. 17, pp. 33-39(2011)
- 5) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他: 育児不安に関する研究臨床研究IV-育児困難感のプロフィール評定試案-, 日本子ども家庭総合研究所紀要, Vol. 34, pp. 93-111(1997)
- 6) 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田まり, 他: 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連, 心理学研究, Vol. 64, No. 6, pp. 409 - 416(1994)
- 7) 木村一絵, 西内恭子, 平野(小原)裕子, 他: 母親の育児意識を構成する概念とそれに関する要因, 九州大学医学部保健科学紀要, Vol. 7, pp. 69 - 76(2006)
- 8) 富田道子, 田丸直美, 深澤悦子, 他: 広島学園都市大学の地域子育て支援拠点事業に関する一考察 - 「いーぐる」利用者への第7回質問紙調査から -, 広島都市学園大学子ども教育学部紀要, Vol. 73 No. 2, pp. 3-12(2020)
- 9) 岩國亜紀子, 槻木直子, 菅野峰子, 他: 乳児の養育者と共に考える子育て支援プログラムの評価 - 参加型アクションリサーチ -, 兵庫県立大学看護学部 地域ケア開発研究所紀要, Vol. 24, pp. 115-130(2017)
- 10) 井田歩美: わが国における「母親の育児困難感」の概念分析-Rodgersの概念分析法を用いて-, ヒューマンケア学会誌, Vol. 4, No. 2, pp. 3-12(2013)
- 11) 榎本妙子, 福本恵, 堀井節子, 他: 育児不安の実態と関連要因の検討(第2報)-育児不安測定因子分析-, 京都府立医療短期大学部紀要, Vol. 8, No. 2, pp. 163-172(1999)
- 12) 薊奈保子, 向井敦子: 子育て中の養育者のニーズと育児支援のあり方についての一考察, 人間文化生活研究, Vol. 2016, No. 26, pp. 157-161(2016)
- 13) 佐藤朗子: 幼児を持つ母親の対人関係と子育てに対する態度, 新潟青陵短期大学研究報告, Vol. 29, pp. 163-173(1999)
- 14) 清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子, 他: 母親の幸福感を高めるコースプログラムの実施と評価, 日本助産学会誌, Vol. 25, No. 2, pp. 157-161(2011)
- 15) 小島康生, 志澤美保: 初めての子育てに困難を抱えた母親を対象とした支援プログラムの効果 - 愛知県豊山町における実践 -, 小児保健研究, Vol. 73, No. 2, pp. 347 - 353(2014)
- 16) 岡田尚美, 和泉比佐子, 松原三智子, 他: 母親を育児サークルへ「つなげる」保健師の支援 - 軽微な育児不安や孤立感をもつ母親への行為に焦点を当てて -, 日本地域看護学会誌, Vol. 15, No. 1, pp. 119-125(2012)